音楽現代 The Ongakugendai 2
クラシック音楽誌

第58回定期演奏会批評

◆東京ニューシティ管弦楽団 第58回定期演奏会

内藤彰の指揮、まず、リストの『死の舞踏』、ピアノ独奏の干野宜大は粒のそろった音による華麗かつ迫力ある表現、「怒りの日」の主題をつねに明確な姿で奏で、変奏では天衣無縫、ときにひじょうに繊細に音を紡いで悲愴的な表情を浮かびあがらせ、結末では恐ろしげな表情で主題を奏し、襲いかかるような迫力ある弾奏で聴かせた。

ブルックナーの交響曲第5番は1876年初稿（川崎高伸編集による）での演奏、その演奏は生彩さに関してはいまひとつのところもあったが、ノン・ヴィブラート奏法によりハーモニーがよく響き、また、丁寧かつ力のこもった演奏、とりわけ、第3楽章はテンポ感もよく、力強いスケルツォ、第4楽章ではオルゲルプンクトが聴こえ、フーガは折り重なるよう、第1楽章の主題の再現は堂々とした鳴り響きで、コーダでは高揚感ある弦や迫力ある金管の吹鳴などもあり、壮大であった。（11月17日、東京オペラシティ　コンサートホール）

（菅野泰彦）